

宮に対する人々の誤解

ルカ福音書21:5-24

(新改訳2017訳)

- 21:5 さて、宮が美しい石や奉納物で飾られている、と何人かが話していたので、イエスは言われた。
- 21:6 「あなたがたが見ているこれらの物ですが、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることのない日が、やって来ます。」
- 21:7 そこで彼らはイエスに尋ねた。「先生、それでは、いつ、そのようなことが起こるのですか。それが起こるときのしるしは、どのようなものですか。」
- 21:8 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れて、『私こそ、その者だ』とか『時は近づいた』とか言います。そんな人たちの後について行ってはいけません。
- 21:9 戦争や暴動のことを聞いても、恐れてはいけません。まず、それらのことが必ず起こりますが、終わりはすぐには来ないからです。」
- 21:10 それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、
- 21:11 大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい光景や天からの大きなしるしが現れます。
- 21:12 しかし、これらのことすべてが起こる前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。
- 21:13 それは、あなたがたにとって証しをする機会となります。
- 21:14 ですから、どう弁明するかは、あらかじめ考えない、と心に決めておきなさい。
- 21:15 あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。
- 21:16 あなたがたは、両親、兄弟、親族、友人たちにも裏切られます。中には殺される人もいます。
- 21:17 また、わたしの名のために、すべての人に憎まれます。
- 21:18 しかし、あなたがたの髪の毛一本も失われることはありません。
- 21:19 あなたがたは、忍耐することによって自分のいのちを勝ち取りなさい。
- 21:20 しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。
- 21:21 そのとき、ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。都の中にいる人たちはそこから出て行きなさい。田舎にいる人たちは都に入ってはいけません。
- 21:22 書かれていることがすべて成就する、報復の日々だからです。
- 21:23 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。この地に大きな苦難があり、この民に御怒りが臨むからです。
- 21:24 人々は剣の刃に倒れ、捕虜となって、あらゆる国の人々のところに連れて行かれ、異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。

【祈りながら考えよう】

- (1) 当時の人々は、エルサレムの神殿についてどのように誤解していましたか。
- (2) 世の終わりの前兆にはどんなことがありますか。
- (3) エルサレムが軍隊に囲まれた時、当時のキリスト者たちはどのように行動しましたか。

【解説】

(1) 受難週第3日目

イエスは受難週の第3日、火曜日、朝から夕方まで宮において教えをなさった。そして夕方になってオリブ山を越えてベタニヤに帰られる。あるいはオリブ山で一夜を過ごされる。それが受難週の毎日の持ち方であった。この日も夕方になって、イエスは弟子たちを引き連れてエルサレムを出て行こうとされた、その時のことである。《さて、宮が美しい石や奉納物で飾られている、と何人かが話していたので、イエスは言われた。「あなたがたが見ているこれらの物ですが、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることのない日が、やって来ます。》(5節)

マタイ24章1節を見ると、《イエスが宮を出て行かれると、弟子たちが近寄って来て、イエスに向かって宮の建物を指し示した》とある。

マルコ13章1節では、《イエスが宮から出て行かれるとき、弟子の一人がイエスに言った。「先生、ご覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」》とある。

こうして共観福音書3つを合わせて見ると、ルカ福音書で言われている《何人か》というのは、弟子たちのことであるということがわかる。マタイでは《弟子たち》、マルコでは《弟子の一人》となっており、事ははっきりしてくる。

(2) 見事な神殿

今しも、神殿を出る時のことである。弟子たちは、その時今さらのようにこの神殿の壮麗さに見とれていた。そして主イエスにも、神殿の建物の美しさを称賛してもらいたかった。

《美しい石》とは、大理石である。かなり立派な大理石の円柱や純金製の大きなぶどうの木があって、ここで「石」とか「奉納物」と言われているのは、それらのものを指している。

《イエスは言われた。「あなたがたが見ているこれらの物ですが、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることのない日が、やって来ます。》

こんなすばらしい神殿が、崩されるなんて考えられない。しかし、イエスは即座に語られた。どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることのない日が、やって来ると。

人間の手で作られたものはそれがどんなにすばしくても、それはやがて朽ち果て、過ぎ去っていく。

それが神の宮であってもしかりである。神をその建物と取り違え、神殿の立派さが偶像になっているところに問題がある。

教会もしかりである。神の教会といえども、それが人の手によって建て上げられているものであれば、人によって壊されてしまう時が来る。

(3) 終末の前兆(しるし)

《そこで彼らはイエスに尋ねた。「先生、それでは、いつ、そのようなことが起こるのですか。それが起こるときのしるしは、どのようなものですか。》(7節)

弟子たちは、あの美しい豪華な神殿が、崩されてしまう時が来る。それはきっと世の終わりの出来事に違いないと思った。いつ、そのようなことが起こるのですかと、イエスに尋ねざるを得なかった。

エルサレムの神殿の破壊と世の終わりとは同じではないが、そこにはある関係がある。エルサレムの神殿の破壊こそ世の終わりの裁きを象徴している。そこで、主イエスは世の終わりの前兆について語られた。

なぜエルサレムの神殿は破壊されなければならないのか。昔、ソロモンの神殿の場合は、神殿にイスラエル人によって偶像が運び込まれるまでに信仰が墮落していた。神殿崩壊と捕囚は、そうした人々への神のさばきであった。

主イエスの時代のイスラエル人は偶像を運び込むことはしなかった。かえって、偶像崇拜を強要しようとする異教徒と戦う状況であった。しかし、イスラエル人は、形は異なるが偶像礼拝者になっていた。形式的に礼拝するだけで、心で神を礼拝していなかった。彼らは、神が遣わされた救い主、宮をきよめるメシヤとしてのイエス・キリスト、旧約聖書の預言の成就としてのイエス(参照マラキ3:1)を迎えようとしなかった。

(4) 偽預言者の出現

《イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れて、『私こそ、その者だ』とか『時は近づいた』とか言います。そんな人たちの後について行ってはいけません。戦争や暴動のことを聞いても、恐れてはいけません。まず、それらのことが必ず起こりますが、終わりはすぐには来ないからです。」

終わりの前兆として、大勢の偽キリストが現れるということである。「我こそは真の救い主である」と、偽キリストが現れる。今日の「エホバの証人や統一協会のような異端」も、イエスの再臨と終末の到来を様々な形で主張している。

キリストの再来であると唱えている者が現れている。またキリストの再臨は何年の何月であると言い切って、世を惑わしてきた者が、過去のキリスト教史の中にしばしば起こってきた。

二千年前、ユダヤ人の中に偽メシヤが現れた。ユダヤ人を集め、ローマに対して反旗をひるがえした。使徒の働き5章を見ると、パウロの律法の先生であったガマリエルが言っている言葉の中にも、そのことが言われている。

《それから議員たちに向かってこう言った。「イスラエルの皆さん、この者たちをどう扱うか、よく気をつけてください。先ごろテウダが立ち上がって、自分を何か偉い者のように言い、彼に従った男の数が四百人ほどになりました。しかし彼は殺され、従った者たちはみな散らされて、跡形もなくなりました。》



彼の後、住民登録の時に、ガリラヤ人のユダが立ち上がり、民をそそのかして反乱を起こしましたが、彼も滅び、彼に従った者たちもみな散らされてしまいました。そこで今、私はあなたがたに申し上げたい。この者たちから手を引き、放っておきなさい。もしその計画や行動が人間から出たものなら、自滅するでしょう。しかし、もしそれが神から出たものなら、彼らを滅ぼすことはできないでしょう。もしかすると、あなたがたは神に敵対する者になってしまいます。」（使徒5:35-39）

真理をついた言葉である。偽メシヤが現れて騒乱を起こした。その度ごとに他愛もなく鎮定された。異邦人の支配の下におかれ、耐えがたい苦痛の中にあったユダヤ人にとって、しばしば起こっていた。

(5) 御言葉から離れてはならない

本物の宝石がある所には必ず人工の偽物が作られる。キリストもまた然りである。いつの時代でも、「我こそは世を救う者である」と出てくる。その背後には悪魔が働いている。世を惑わし、まことの神を信じる者をも惑わそうとする悪魔の策謀がその背後にある。

不思議なわざや不思議な言葉や、様々な事をもって惑わす者が次々に起こってくる。私たちは唯一の神の啓示であり、聖霊によるこの聖書に寄り頼み、深く学び受け取って、神の御言葉から離れない者でなければならない。

(6) 世界の動揺と天変地異

①戦争

《戦争や暴動のことを聞いても、恐れてはいけません。まず、それらのことが必ず起こりますが、終わりはすぐには来ないからです。それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり」世の終わりの前兆とも言うべきものはいろいろある。戦争や暴動は昔からあったことであるが、世の終わりにになると、一層激しくなり、紛争がやむことなく、あちこちで起こる。しかし、恐れるなどイエス様は言われる。

②大地震

《大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい光景や天からの大きなしるしが現れます。》大地震と言えば、当時小アジアのラオデキヤ地方に、紀元61年にかなり広い範囲にわたって大地震があった。黙示録の2-3章にあるアジアの7つの教会、エペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアの地域一帯が大地震に襲われ、その町々は壊滅に帰した。ローマ帝国の援助によって復興したという歴史がある。また79年のポンペイの大噴火による地震は特に有名である。ポンペイ市が全く埋もれてしまった。

③飢饉

飢饉と言えば、使徒の働き11章27節以降に、かなりの飢饉の時があったことが告げられている。時はローマ皇帝クラウデオの時、紀元44年の頃である。
《そのころ、預言者たちがエルサレムからアンティオキアに下って来た。その中の一人の名をアガボという人が立て、世界中に大飢饉が起こると御霊によって預言し、それがクラウディウス帝の時に起こった。弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。彼らはそれを実行し、パルナバとサウロの手に託して長老たちに送った。》

④天変地異

《恐ろしい光景や天からの大きなしるしが現れます。》全世界の人々が願うことは、この世界が安定した世界になること、調和した世界になることが切に願われている。しかし、この世界はそういう方向に行かない。荒れに荒れ、動揺に動揺する。人の世界だけではない。天にも地にもその異変が相次いで起こっていく。文明は進んでも、この天災を防ぐことはできない。

(7) 天に根ざす信仰

キリスト信仰は、神の永遠なる「ご経綸、ご計画」にあずかることである。この世界を足場とするのではない。来たるべき神の国、神の世界を受け継ぐ者とされる。人間が人間の手によってつくる世界はいずれは破滅する。神の手による世界は永遠である。この永遠なる世界に住む者として、私たちはこの世から救われる。
「私たちの国籍は天にある」(ピリピ3:20)という信仰を持ってこそ、たとい身はこの地にあっても大安心である。どんなに震われるこの世にあっても、真のあり場所は天にあり、神に根ざしている。そこに私たちの平安の根拠がある。
《わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。》(ヨハネ14:27)

(8) 御名ゆえの迫害

《しかし、これらのことすべてが起こる前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。それは、あなたがたにとって証しをする機会となります。》
キリスト教史は最初迫害をもって始まった。しかし、どんなに反対されても、この神のわざは決して妨げられない。反対する者のすべての反対を突き抜けて、いよいよ進展していった。
決して神より出たものを滅ぼすことはできない。迫害することによって、かえってキリスト者に対して「その信仰の証しを立てる機会」を与えるだけのことである。
主の弟子たちは捕らえられ、迫害され、宗教裁判や民事裁判にかけられ、投獄されることになる。彼ら悲劇のように思えるかもしれないが、主はそれをご自分の栄光を証しする機会と変えてくださる。

(9) 人が反論できないことばと知恵

《ですから、どう弁明するかは、あらかじめ考えない、と心に決めておきなさい。あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。》
私たちが生まれ持った性質は、何に対しても自分で構えてしまう。破れるしかない構えに、自分で作った武具に頼ろうとする。そんなものは他愛もない、厚紙を胸当てにつけているようなもの。たちまち穴があいてしまう。
どのように抗弁するか、前もって準備しておく必要はない。危機に追い込まれた時は、神が彼らに特別な《知恵》を与えてくださるからである。

(10) 身近な者の裏切り

《あなたがたは、両親、兄弟、親族、友人たちにも裏切られます。中には殺される人もいます》
身近に起こる出来事である。神を信じるがゆえに、この真理なる道を歩むがゆえに、古きこの世につく身近な者から様々に反対され、裏切られる。親しい兄弟も、親族も、親しかった友人も、冷やかに裏切っかえりみない関係が起こっていく。しかし、キリストにある者は、そういう中であって、すべてから区別されていく。
この世は血肉と言っても、どんなに親しい関係と言っても、一皮むけば皆自分中心である。どんなに親しみ、信頼し合ったように思えても、ひとたび自分の利益に関わることになれば、人は冷ややかな敵となる。これがこの世の人間関係である。

自分の家族を裏切る者も現れる。末信者の《親族》がキリスト者を裏切る。《中には》キリストの御名のゆえに殺される者もいる。16節の《中には殺される者もあり》と18節の《しかし、あなたがたの髪の毛一筋も失われることはありません》は一見矛盾しているように思える。「ある者たちはキリストのゆえに殉教の死を遂げるが、彼らは霊的には完全に守られる」という意味であろう。彼らは肉体的には死ぬことになっても、魂が滅びることはない。

(11) 勝利の信仰

《あなたがたは、忍耐することによって自分のいのちを勝ち取りなさい》。
これは、当時の人々の魂が耐え忍ぶことによって救われるという意味でない。救いは神の恵みの賜物であり、キリストの身代わりの死と復活を信じる信仰によって受け取るものであり、聖書はそれ以外のことを述べてはいない。
忍耐する者は肉体的、物質的な危害を加えられないという意味でもない。背教することなく迫害に耐える者は、キリストの再臨の時に救われるということ述べている。

(12) エルサレムの悲運

①主の警告

紀元70年頃の初期のキリスト者たちには、エルサレムが崩壊し、美しい大理石の神殿が崩れ落ちる前に、主から次の特別な警告が与えられていた。
《しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。
そのとき、ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。都の中にいる人たちはそこから出て行きなさい。田舎にいる人たちは都に入ってはけません。
その時、ユダヤにいる人々は山に逃げなければならない。エルサレムの都を頼って、そこにとどまってはならない。心を制してそこを立ち退くのだ。決して都に入ってはならない。

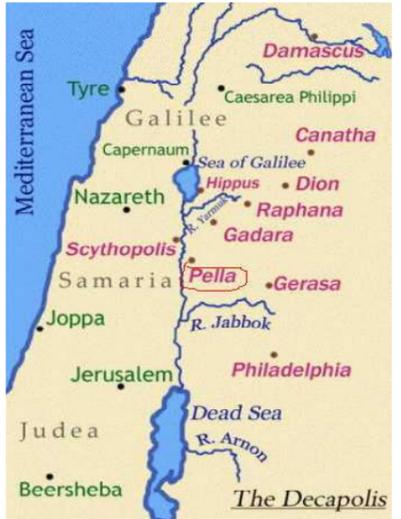


破壊されるエルサレムの都

シリア総督セステウス・ガルスがエルサレムを包囲したのは、紀元66年の末から67年の初めにかけてであった。ローマの将軍ティトゥスに指揮されたローマ軍の5ヶ月間の包囲の後、70年6月、都は落ちた。
不信仰な者は、「軍隊に町を包囲されたら、逃げ出せない」と主張したかもしれない。しかし、主のことばは必ず成就する。
その包囲が一時解除された時、66年、主を信じるユダヤ人たちは上記の主イエスの警告の言葉に従い逃げる機会があった。

②主の警告に従ったキリスト者たち

キリスト者たちは、主に言われた通りにヨルダンを渡ってペラ（デカポリス、ヨルダン川から東へ数キロ、右図参照）と呼ばれる山へ避難した。そこで助かったのである。
ヨセフォスの「ユダヤ戦記」によると、捕虜として連れ去られたイスラエル人の数は9万7千人、死者の数は百万人に達した。たといこの数が誇張されたものであるにしても、きわめて多くの犠牲者を出したことは紛れもない事実である。
なお、ローマの歴史家タキトゥスの伝えるところによると、紀元70年以前のエルサレムの人口が通常60万人であったというから、この混乱時にいかに多くの人が都に逃げ込んだかが分かる。



ペラ遺跡(Pella)